

ベルダーシュは、柔弱だから、あるいは同性愛だから、 ベルダーシュになるのだろうか

● 藤 崎 康 彦

1、問題

北米先住民には「なぜベルダーシュという制度があるのか」が筆者の関心である。「制度」は個人の資質や特性とは関連はしているが、両者は基本的には独立のものである。制度に個人が従うことがあっても、あるいは個人がその制度を利用することがあっても、制度は特定の個人を超越し、本来はそれに先立つものである。個人（たち）の何らかの特性のために制度が特別に作られるとしたら、そこには相応の特別な理由がなければならない。

ベルダーシュについても、ある特性（臆病であったり、同性愛であったり）の人が社会には必ずいるので、そういう制度が存在するという理解がこれまでの基本であった。例えば、勇敢で戦闘的な「平原インディアン」の間では、戦士（かつ狩人）になるにはあまりに柔弱なので、本人自身もそうなることを回避し、社会的にも男としては扱われず、女として女の服を着、女の仕事をすることになる、それがベルダーシュだ、と従来の人類学では説明されることが多かった。

この理解の仕方に従うと、少なくとも「平原インディアン」の場合には、男女それぞれのあり方について、類型的で全面的な規定がなされているように感じられる。或いは本質主義的な規定といってもよい。つまり男は勇猛で、女は弱いものという価値付けである。しかし、これは適切な理解ではないかも知れない可能性に筆者は気がついた。

それは「平原インディアン」の一種族であるクロー族（the Crow）の資料の中に見逃し得ない一節を見いだしたことが理由である。本稿はクロー族の膨大な資料の中の僅かな記述から、他の理論などを媒介にして新たな見方を形成する筆者の試みの一部である。

2、資料と議論

早速私が注目した資料の紹介から始めたいが、議論を展開するのに必要な範囲で、最低限の背景の説明は、その前に行っておきたい。クロー族は母系出自集団（クラン）を持つ。クランはいくつかのグループに纏められていて、そのグループ内では婚姻は避けられる。つまりそのグループを基本とすれば外婚制がとられている。親族の他に、クロー社会を造っている結社と言うべき組織が他にいくつかある。その一つが軍事結社（military society）である。軍事結社への加入と、あるクランの成員であることは必ずしも関係はなく、例えば姻族の関係を契機にしても結社に参加する。クロー社会は大きく見ればクランとクラン横断的な結社組織で構成されているようである。

軍事結社といっても、集団での狩猟と敵対部族との戦闘とに主に従事し、キャンプでは警察的機能も果たす。狩猟では一部の者の抜け駆けを罰したりするのは警察的機能の一つである。春から初冬までが活動の時期である。従って軍事専門の常設的な組織ではない。また成員となるに当たってのイニシエーションがあるわけでもない。

毎年春になるとリーダー、サブリーダーと将校（四人）を結社員の中から選ぶ。任期は狩猟期の終る冬までである。将校はそれぞれ特別な職棒（staff）を持つ。二本は真っ直ぐで、二本は先

が(こうもり傘の柄のように)曲がっている。これらの将校についてローウィの記述を引用する。その引用の中に、筆者が注目した部分が含まれている (Lowie1913:158)。括弧内は筆者の入れた補足である。また引用中の下線部強調も筆者のものである。

四人の、職棒を持つ将校は、戦闘の際、職棒を地面に突き立て、生命の危険を冒してその職棒の傍らに留まる。しかしながら、もし、友人の誰かが職棒を抜き取った場合は、その将校は逃走することが許される。しかし決して自分で棒を抜いてはならない。「Grey-bull(ローウィのインフォーマントの一人)」の言うところでは、先の曲がった職棒を持ったものは抵抗する(抗戦する)前に短距離なら走ることが許される。これに対して真っ直ぐな職棒を持つものは絶対に走ってはならない。また、後者(真っ直ぐな職棒を持つもの)が彼等の職務を逃れた場合は、先の曲がった職棒を持ったものがそうした場合よりも不名誉な(不面目な)ことになる。(「Grey-bull」以外の)他の人(インフォーマント)たちはこの二種類の将校には、義務あるいは威信について、何らの差はないと言っている。(いずれにしても)敵から逃走してはならないという原則に従って行動できなかった将校は軽蔑され、月経中の女のようにいわれる。

注目すべき点は下線部にある。これまでの理解のように勇気のないもの(或いは男らしくないもの)を女のように見なすのではなく、「月経中の女」に擬えている。これはどういう意味であろうか。(戦の場から)逃走することが「軽蔑」や侮蔑に値することはよくわかる。また男を女のように扱うことが辱めを与えることになるのも普通のことである。平原インディアンで、捕虜になった敵に女の服を着せて奴隷のように扱うことがあることは知られている。この場合の強いられた女装は辱めの表現になっているだろう。明らかに「女のように弱いもの」として男扱いをしないことで捕虜を貶めているのであると思われる。

とするなら、敵に背を向けて逃げ出す将校は「女のように」と言われてもよさそうであるのに「月経中」の女のように言われるという。では「月経」にはどのような意味が含意されているのであろうか。我々の文化のケガレの観念から安易に類推して決めつけることは避けなければならない。やはりローウィの残した資料の中から手懸りを探すしかない。

クロー族に見られる月経の観念に関して次のような記述がローウィにある(ローウィ1912:220)。引用の様式は先と同じである。

ある老女の言うところでは、そしてその言い分は「Bull-chief(ローウィのインフォーマントの一人)」によって確証されたのだが、少女たちは思春期の前(つまり月経の始まる前)に結婚するのが普通だから、クロー社会には月経小屋はないという。年若くして結婚する事実ははっきりとしているのではあるが、以前は月経小屋はあったことは「Child-in-his-mouth(同上)」とその妻が確証してくれた。彼等の言うところでは、ずっと以前は、月経中の女は特別なティピイ(分解組み立て自由で、可搬性のある、革製の円錐形の小屋)で過ごしたものだという。四日間は野生の根茎のみを食べ、肉を避けたという。そして(月経が終ると)湯浴みして新しい衣類を用意し、常緑樹の葉で火を焚き、その煙で衣類をいぶし、身につけて、自分の家に戻ったという。私(ローウィ)のインフォーマントの大多数は、しかしながら、月経小屋のあったことを否定した。初経を見た少女を祝福して何らかの祝いが行われることはなかった。それどころか(初潮があったのに)まだ結婚していないと、他の少女たち

はからかって笑いものにした。

未だに続いているように思える唯一の規制は、月経中の女たちは（儀礼用の）呪薬の包みに近寄ってはならないということである。これらの包みは彼女の月経が終るまで小屋から（他へ）移しておかなくてはならない。昔は女は月経の時には（普段よりも）劣った馬に乗ることを余儀なくされ、傷ついた人や、集団で戦に出ようとしている戦士たちに近づくことは許されていなかった。

ローウィのインフォーマントの大多数が（ローウィの調査していた1900年代初期。これを彼の民族誌的現在とする。）月経小屋の存在を認めなかったのは、それほど速やかに文化的な記憶が失われてしまっていることを意味するだけで、確にかつては存在していたものと思われる。クロー族とは敵対関係にあった、同じ平原インディアンに属するシャイアン族にも、月経中の女性たちは隔離された小屋に籠もる習慣が知られていた。クロー族の上記の引用において、何よりも呪薬の「包みは彼女の月経が終るまで小屋から（他へ）移しておかなくてはならない」ことがその名残であることは明かだ。今は別の小屋に籠もる習慣はなくなっているが、月経中の女性は聖なる呪薬には害となり得るという観念は変わらず存在している。以前は別の小屋があったために女性が離れたが、現在は女性が月経中も家族と普通に暮らしているので、男達は呪薬の方を女性から隔離しておく必要が生じているのである。また、月経中の女性にかかるそれ以外の規制も、彼女らが「その状態の時には」何らかの危険を他（馬や負傷者や戦士ら）に及ぼしうることを推測させる。

このように見てゆくと、蒲生（1978）の指摘した「状況の論理」と「価値の論理」の違いが意味を持つてくることが感じられる。蒲生の発想については、本稿と時期を同じくして刊行される予定の博学『文学部紀要第四十七号』の拙稿で紹介したので、ここでは筆者なりの理解に従ってその要点のみを記す。

日本の民俗文化には（ケガレとされる）月経や出産のための特別な小屋（産屋とか他屋とか月小屋とか地域によって呼ばれている）がある地域と、ない地域とがあった。蒲生は小屋の有無は女性や月経に対する態度の違いを表すと考え、そこからその社会の価値観を類型化して構成した。前者は月経のケガレに関していえば「その時」にケガレを被っていると考えるので、特別な小屋に「その時」は忌み籠もりする。そういう行為を要請する「状況」が解消すれば、女性はこれまでと変わらない普通の生活をまた回復する。こういう民俗的態度を「状況の論理」とした。これに対して、そのような習慣のない社会は女性そのものに対してある価値付けをしていることが想定される。女性はケガレを持つ存在であるとして社会的に低く見るような価値観であり、本質主義的な態度が予想される。これを「価値の論理」とした。封建的な武士階級などのあり方を思い浮かべれば理解しやすい。

ここで、ベルダーシュについての議論を蒲生の概念を用いて見直してみれば、筆者にはこれまでのアメリカ人類学の一般的な理解は、白人の人類学者たちの持つこの「価値の論理」に基づくもののように感じられる。これに対してクロー族の戦士の怯懦への侮蔑は、ある状態の女性たちを引き合いに出してなされている。女性一般を劣ったものとして喩えに用いているのではない点で、「状況の論理」に親和的な社会的態度と感じられる。ベルダーシュは生来軟弱、怯懦であるが故に社会的に女の位置を与えられるとする「価値の論理」的な理解は、クロー族のこのような論理とは矛盾するものと感じられる。

ではクロー族のベルダーシュについては、どのように理解すべきだろうか。クロー族の人類学

的研究においておそらく最高の権威であるローウィはベルダーシュについては三点の資料(1912、1921、1935)において、それも僅かのことしか書いていない。ローウィ1935は1912、1921などのすでに発表された調査研究論文に基づいた、クロー族についての総括的な民族誌ともいえるべき著書である。従って、ベルダーシュに関しては前者は後二者の記述以上の内容はほとんどない。そしてそれらすべてを総合しても情報は多くない。しかし、その僅かの記述の中にも、ベルダーシュ(ローウィはそれを表すクロー族の言葉を「bate」と表記している)はローウィの調査したときには一人だけ知られていて、その人に一回会ったことがあると記している。その観察では170cm位の背丈でがっしりとした体格の五十年配の人であったという。そして他の人から聞いた話として、そのベルダーシュはかつて「スー族との交戦において雄々しく戦った」ことがあると述べている(Lowie1912:226、同1935:48、下線強調は筆者)。これをみても分かるように、実際のベルダーシュは柔弱でも女々しいわけでもないのである。ただ女の服装をし、女たちとの交際を好み、女の仕事に優れているというだけである。

ホモセクシュアルであるかについては、直接的な言及をせず、ただ *inverts* という言葉を用いているだけである(Lowie1935、同箇所)。この点には、むしろアメリカ政府から派遣されてクロー族の居住地で二年ほど医師をしていたホールダーが触れている(Holder1889)。彼は一人のベルダーシュ(彼は「bote」と表記している)を完全に裸にして医師として詳しい観察を行い、インタビューもしている。この人は立派な体つきをした、およそ身長172cmで体重71kg位の、当時33歳の男性であった。外性器の外観は、位置と形状は全く正常で、大きさは幾分普通より小さかったという。つまり彼は、ベルダーシュについての俗説にまみられるような *hermaphrodite* であったりはしなかったということを意味する。本人は女性と性交渉したことはないというが、以前彼は女性との性行為を時折行っていたというものも部族の中にはいる。ホールダーは、同性愛行為については、この人は口唇性交のみを行っているとしている(Holder1889:625)。彼の論述ではこのベルダーシュについては女の服装をすることと、女の仕事をすること、女性であるかのように見せようとする(検査のためにホールダーの前で裸になったときに外性器を腿の間に挟み込んで、外からは見えないようにすること)などが印象的なこととして記述されている。また、確かめたわけではないがと断りつつも、口唇性交の際には本人もオーガズムをおそらく経験しているだろうとしている(同書:623)。

クロー族についての以上のような簡単な検討からも、少なくとも、蒲生のいう「価値の論理的な、雄々しい男性的なあり方を回避することが結果としてベルダーシュであることに結びつく」という発想は支持しがたいと思われる。これが本稿の問題設定の一部に対する結論である。

3、今後の課題

3-1、女性の社会的地位はどのようなものか

女々しい男だからベルダーシュになるのではないことは、理解できた。クロー社会は、硬直的な「価値の論理」に縛られた社会ではないといえよう。しかしながら、だからといってそれはそのまま「状況の論理」のみの社会であることにはならないだろう。そのような文化特徴は、男と女の地位の差の隔たり、特に女性の社会的地位を詳しく検討しなければ判断はつかない。少なくともローウィは女性の社会的地位は、外部の観察者が思うほどには、低くないとしている(1917:77)。確かに女性を人として尊重していない、あたかも夫の所有物のように扱っているかのように見える慣習がある。その一つはローウィもあげているように「妻誘拐 (*wife abduction*、あるいは *wife kidnapping*)」である(同書、同箇所)。筆者も最初読んだときには驚いて、クロー族

に親近感を感じることができず、関連の資料を読み始めてからも数年はクロー族を論文の題材に取り上げる気になれない原因（の一つ）になった。

これは先の軍事結社のうち、対抗意識の強い Fox 結社と Lumpwoods 結社の成員間でのみみられる慣習である。一年のある時期に限ってそれぞれの結社の成員は相手の成員の妻を奪う権利が互いに認められている。しかしそれは、その妻が自分を奪おうとする相手の結社の当の男の恋人や愛人でかつてはあった場合に限定されている。男は相手の結社の男の家に行き、妻を要求する。夫はそれを拒むことはできない。妻が、そのような関係を否定する場合があるが、要求する男の結社の仲間たちが証拠を集め、抵抗できないようにする。多くは妻も夫も要求に従うようである。その妻が子供を持っていたとしても事情は変わらない。子供とともに相手の結社の男の下に移る。

不思議なことに「妻を盗む」あるいは「妻を誘拐する」男はその奪った女を長くは手元に置いておかない。せいぜい数ヶ月のようだ。（元々男はすでに妻を、場合によっては一人らず持っている場合が多い。）解放された妻は以前の夫の下には戻らない。また、そういう妻ともう一度一緒に暮らすことは、奪われた男にとっても考えられないほどの不名誉あるいは恥となる。その女は第三の男と再婚するのであろうと思われる。

他にも何らかの理由で妻に不満を持つ夫が、祭りなどの集会の際に、妻を放棄することを公言する慣習もある。その女に対しては男は誰でもが自由に接近することができる。ローウィはこれも部外者がクロー社会における女の地位を低いものと判断する理由になるだろうとしている。しかし、類似の制度はシャイアン族にもあり、むしろ白人たちがインディアンの女たちの地位は低いと一般的に思う理由の一つであろう。

しかしながら、ローウィも指摘するように、女は自分の財産、所有物の自由な処分権を持つ。また、結婚において、女の側から離婚したりする自主性もある。性的にも主体的で制約が少ない印象を筆者は資料から受ける。物質的に不自由なところでは家事、例えば水汲みなどは大変な労力を必要とするもので、それを皆女性たちが担っているからインディアンの女性たちは男の奴隷のようなどといわれるのだろう。

このように、女性の社会的地位は、多面的に考えなければ判断できないテーマであるので、今後の課題とするのであるが、一つだけ見通しを持つことがある。クロー族に限らず多くの平原インディアン諸族では、女による男と同等の社会的達成を妨げる制度的障害は意外と少ないように感じられる。男女の社会的隔壁は、女の側からみた場合低い、あるいは薄いように思う。この点を詳しく証拠立てることができれば、なぜ「女のベルダーシュ」は少ないのかの理解にもつながる可能性がある。

3-2、ベルダーシュは同性愛か

今回の資料の範囲では、これも判断できない。「bote」についての直接観察事例が一つしかないこと、間接的であっても全般に情報が少ないことが障害となっている。しかし、それらからでも、男が好きで、男と性的な関係を持ちたいからベルダーシュとなる道を選ぶとは考えにくい。資料から見る限り、「bote」はむしろ女に関心を持っている、惹かれているのであり、それらのカテゴリーに属したいと願っているかのようである。まず gynophilia（女性羨望、女体嫉妬）的感觉があって結果的に男性との性的な関係も生じるのではないかと筆者は感じる（藤崎2012刊行予定参照）。

3-3、クロー族のベルダーシュの儀礼的機能はどのようなものか

多くの平原インディアン諸族にみられる「サンダンス (Sun Dance)」はクロー族にもある。そのある場面で「bote」は不可欠の構成要素の一人になっている。諸資料を概観する限り儀礼的場面での関与はそれだけのようである。「サンダンス」そのものと、それが置かれている社会的脈絡を分析することが、一部分にせよ、クロー社会の中の「bote」の意味づけの理解につながると思う。

謝辞

本稿は、筆者の本年度末刊行予定の『文学部紀要』論文と並び、本学平成二十三年度特別研究助成による研究成果の一部である。記して関係各位に感謝申し上げる。

参考文献

藤崎康彦 2012 (刊行予定) 「ミソジニー、ジャイノフィリア、ベルダーシュ」『跡見学園女子大学文学部紀要』第四十七号

蒲生正男 1978 「産屋・他屋の文化とその主体的条件」『増訂・日本人の生活構造序説』ペリカン社所収

Holder, A. B. 1889 'The Bote. Description of a peculiar perversion found among North American Indians,' *New York medical journal: a weekly review of medicine*, Vol.50, pp.623-25

Lowie, R. H., 1912 'Social Life of the Crow Indians,' *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, Vol. IX, Part II.

———, 1913 'Military Societies of the Crow Indians,' *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, Vol. XI, Part III.

———, 1917 'Notes on the Social Organization and Customs of the Mandan, Hidatsa and Crow Indians,' *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, Vol. XIX, Part I

———, 1921 'The Sun Dance of the Crow Indians,' *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, Vol. XVI

———, 1935 *The Crow Indians*, New York, Rinehart, (reprinted in 1983 by University of Nebraska Press.)